



利根山光人

Toneyama Kojin

第85号 平成27年4月24日

記念美術館通信

Memorial Art Museum News Letter

〒024-0043 岩手県北上市立花15-153-2

TEL/FAX 0197-65-1808

『遺したい北上の風景画』

昭和25年12月作
及川文吾
F15号画



「展勝地 北上の流れ」

黒岩出身の及川文吾氏は、昭和20年東京大空襲に遭い帰郷、北上市青柳町に居を構えた。この作品は「国破れて山河あり」の故里の風景を描いたものと想われる。沈床や漁法の風景は、今は見られることもなく、往時を偲ばせる貴重な北上川の風景佳品である。ご子息の征一君と私は同級生で、小学時代は、お宅に遊びに行ったが、その時目にした油絵の数々は珍しくて、強烈な印象を受けた。後年私が絵に手を染めたのも、それが遠因なのかも知れないと思っている。

東京美術学校（現・東京芸大）卒業。北上では稀有な画家の一人とも言える。

佐藤 清美さん
（新象作家協会東北事務所代表・美術家）

—「遺したい北上の風景画」募集—

応募希望の方は、北上市まちづくり部生涯学習文化課（0197-72-8304）までお問合せください。



日本の祭

利根山光人記念美術館企画展開催中 「利根山光人 新所蔵作品展」

会期：平成27年4月1日(水)～8月27日(木)
※6月19日(金)は展示替えのため休館

今回、彌恵子夫人から数多く貴重な作品をご寄贈いただき、当館初公開となる画伯の作品を展示しています。「版画」が主で、同じ版画でも、その種類による"味"の違いが楽しめます。

マヤ文明に触発され、古代遺跡をモチーフに世界の国々を歩き、古代人類が残した造形作品や伝承する芸能など人間の根源を見出そうと表現し続けた利根山光人。各国を巡り、画伯はどんな感触を掴んだのでしょうか。画伯の情熱あふれる作品を、ぜひご堪能ください。

〈利根山光人画伯のエピソード〉

「MOMAで見たマチス展は素晴らしかった。今まで20世紀で一番の画家はピカソだと思っていたが、21世紀に最も影響を与える画家はマチスだ！！」

年に何度も海外に行かれる光人先生は、帰国されるとアルテ・トネヤマで旅先の出来事を語ってくれた。20世紀がまもなく終わろうとしている1992年の秋。アトリエの中央で立ったままの姿勢でその感激を少し興奮されて話された。昨日の事のように印象的に焼き付いている。



利根山画伯と東原氏

トウハラ ヒトシ
東原 均（画家 アルテ・トネヤマ講師）

利根山光人画伯、彌恵子夫人が主催するARTETONEYAMA音楽絵画研究所に1984年より参加。現在に至る。

『白い雲』

利根山光人

話のすぢがきは往々絶したまゝの形で、また突然つながるものである。

K学園の入学式も済んだ五月の或日校庭のテニスコートのところで、その少年に奇しくもめぐりあったのである。

少年は驚いて特長のある黒眼を輝やかしながら

「おじさん、この学校の画の先生してんの、ボク今度一年のC組に入ったんだよ」

そしてニコリと笑った。僕も思はずほゝ笑んでしまった。

それは敗戦の傷跡は未だ此処にも彼処にも生々しかったが、それでも五月といふ季節は青い空にミルク色の雲をポッカーリ浮かせていた。

麦島のはずれの小川のへりで不思議そうにカンバスをのぞきこんで見知らぬ少年はこういった。

「おじさん画描いてんの」

「うん……」

「どこからきたの……」

ミルク色の雲と少年の黒い瞳とが思はずこういはしめた。

「おとぎの国からさ……」

「ふーん、おとぎの国だって？ボク本で読んだことあるけど本当にあるのかな……」

僕はうれしくなってしまった。イタリー映画の「靴みがき」みたいな少年がうようよしている現実こんな少年もいるのかと何か超現実的な感じさえしてもう一度ふりかへってしまった。

「ちゃ…おとぎの国から何にのってやって来たの？」

僕はソク座に

「雲にのって来るんだよ」

と云ってしまった。少年の黒い瞳にはたしかに白い雲が映っていたからだ。

それから度々おとぎの国の少年（ボクはいつの間にか自分でこう呼んでいた）に出会った。街の四辻で、畠で小川で、一度は電車の窓から一心に外を見ている少年を見かけた事があった。ボクの気持はその度毎に何かしらある不思議な想念にとらわれてしまうのだった。

ある日、ボクは久しぶりに午さがりの風呂に出かけた。

新しく出来たお風呂には子供と老人とが来ているだけで硝子戸の中はもうもうと湯気がたちこめていた。湯ぶねにつかっていると黒目勝ちの少年の顔が湯気の中からヒョッコリ現われた。その時紅潮した少年の顔が馬鹿に美しく見えた。

「おじさんもこの風呂に来るの……」

「ボク電車にのって来るんだよ……」

それから少年の姿が見えなくなり、永い間病氣したこと。古い映画の一駒の思い出としいつの間にかボクの脳裏からも消えて行ってしまったのだが、K学園の帽章をつけた少年を同じ学園で会おうとは夢にも思っで見なかった。

少年の頬は健康そうに輝いていたが、それでも、黒い瞳の奥底に白い雲が消えてしまったのではないかとボクは独りで心配してしまっ



「海城新聞」(学校新聞)第39号(昭和27年5月8日)から ※旧字等は新聞のまま掲載
提供：山口 昌男 氏 (画伯の海城学園教諭時代の教え子)